

19	安城	安城南中学校	名前 加藤 佑果
分科会番号	11	分科会名	保健体育（保健）

研究題目

がんについて正しく理解し、自分や周囲の健康のためにできることを主体的に考えることができる生徒の育成

1 主題設定の理由

がんは、1981年以降、日本人の死亡原因第1位であり、国立がん研究センターの推計によると、生涯でがんにかかる確率は2人に1人である。また、平成29年の学習指導要領改訂において、中学校では「がんについても取り扱うものとする」と明記された。文部科学省から報告されている「学校におけるがん教育の在り方について」では、がん教育の目標として、①がんについて正しく理解することができるようにすること、②健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにすることの2点があげられている。

2年生を対象に実施したアンケートにおいて、「がんは身近な病気だと思うか」という質問に、「そう思う・ややそう思う」と答えた生徒は96%であった。（図1）しかし、がんについての基礎的な正誤問題の回答率は49.5%と低く、がんに対するイメージを尋ねると、「怖い」「治らない」「必ず死ぬ」など、マイナスなイメージや、間違っ

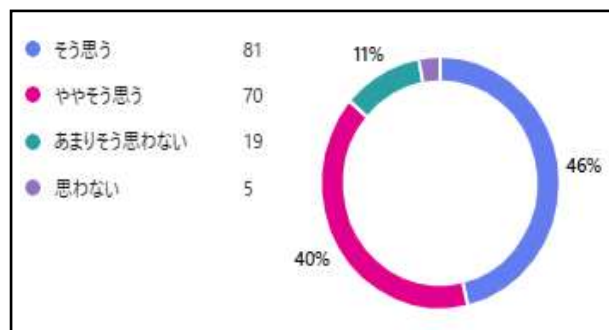


図1 がんは身近な病気だと思うか

た情報が多くあった。また、がんについて知りたいこととして、「なぜがんになるのか」「がんにかからないためにはどうしたらよいのか」を挙げる生徒が多く、予防に関する関心の高さがうかがえた。

2 研究の実践

(1) 「いきいき 長生き みんなで元気！」の授業実践

がんについての正しい知識を伝えるために、「健康な生活と病気の予防」の単元において授業を実施した（資料1）。

①【長生きするためにはどうしたらよいだろう】

- ・ 日本人の死亡原因を確認し、生活習慣病にはどのようなものがあるのかを具体的に知る。
- ・ 平均寿命と健康寿命との違いに着目し、健康で長生きするための方法を考える。
- ・ 生活習慣病の原因を考え、予防するためには運動・食生活・休養及び睡眠が深く関わっていることを知る。
- ・ 自分の生活を振り返り、課題を見つけた上で、自分に合った予防方法を考える。

②【がんについて知ろう】

- ・ がんについての基礎的な知識を、クイズ形式で学ぶ。
- ・ 「がんを防ぐための12カ条」の新旧を比較し、気付いたことを話し合い、がん予防についての理解を深める。
- ・ がん予防については、一次予防だけでなく、二次予防も大切であることを知った上で、がん検診についての調べ学習を行う。

③【がん検診について考えよう】

- ・ 日本のがん検診受診率の資料を見て、日本はがん検診の受診率が他の国に比べて低いことを知る。
- ・ がん検診の受診を迷っている担任の先生が、がん検診を受けようと思うには、どのようなことを伝えたらよいかを考える。

資料 1 単元構想図

①知識の獲得

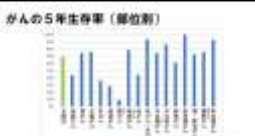
がんについて学習する上で、正しい知識が必要不可欠である。しかし、がんについて学習する場は少なく、生徒にとって、がんはメディアやニュースに出てくる死因として耳にすることがほとんどで、どうしても死を連想してしまう。実際、事前アンケートでは、「怖い」「死ぬ」「治らない」といった言葉が頻出した。

これらのイメージや間違った情報を訂正するために、クイズ形式でがんの知識を伝えた（資料2）。がんは生涯で2人に1人が罹患すると推計されている身近な病気であり、早期発見・早期治療によって治癒の可能性が高まることを伝えた。

生徒の振り返りからは、「がんになる人がそんなにたくさんいることは知らなかった」「がんになったらもう治らないと思っていたけれど、早く見つければ治る可能性が高いことが分かった」とあり、正しい知識の獲得につながった。

②調べ学習

早期発見をする上でかかせないのは、がん検診である。しかし、中学生は対象年齢ではないため、受検したことがなく、イメージしづらいものである。そこで、生徒にがん検診につ

Q.何人に1人ががんになる？ ① 10人に1人 ② 5人に1人 ③ 3人に1人 ④ 2人に1人	Q.「がん細胞」は、体の中で1日にどれくらい出来るでしょう？ ① 10個 ② 500個 ③ 1000個 ④ 5000個
一生のうち、がんにかかる確率 男性 62.1% 女性 48.9% →2人に1人 →がんにかかる可能性は誰にでもある！	 血管などに入り、全身に広がる がん細胞は1日に5000個できると言われています
Q.がんの原因は？ ① 細菌やウイルス ② 遺伝 ③ 生活習慣	Q.がんが治る確率は？ ① 90% ② 70% ③ 30% ④ 10%
・肝臓がん ・胃がん ・子宮頸がん など 細菌やウイルスが原因となるものもある	がんの5年生存率（部位別） 

資料 2 クイズ形式でがんについて学ぶ

いて調べ学習を行わせた。検診の対象年齢や種類、かかる費用や時間、検診のメリット・デメリット等を個人で調べ、グループでも共有した（資料3）。

調べ学習を通して、がん検診についての具体的なイメージをもたせることができた。生徒からは、「お母さんやお父さんは受けているのかな?」「大人になったら受けてみようかな」といった声も聞かれた。

・乳がん、子宮けいがん、胃がんは2年に1度、大腸がん、肺がんは1年に1度、検診を受ける ・40歳以上で定期的に受診を受ける →子宮けいがんは20歳以上から ・メリット→がんの死亡率が低くなる、がん発症自体を防ぐ ・デメリット→がんが見つかり、見つけにくい場合は検査を受けると、がんを見逃してしまうことがある →「偽陰性」という	安城市では、特定健康診査と合わせて、がん検診（胃がん、大腸がん、乳がん、子宮頸がん、肺がん）の受診費用が無料です。 ・自治体主催の検診 大腸 → 500～1000円 肺 → 500～1000円 乳がん → 1000～2000円 子宮頸 → 1000～2000円 胃 → 1500～3000円 ・がん検診、精密検査（二次検診）、がんの診断・治療 ・画像検査・病理検査・バイオマーカー検査 ・メリット ①早期発見・治療できる ②がん発症の予防（がん予防） ③治療費が軽減 ④安心に生活できる
--	--

資料3 生徒が調べ学習をした際のメモ

③担任と連携した授業展開

担任をゲストティーチャーに迎え、担任ががん検診を受けるかどうかを迷っている設定で、生徒が担任にがん検診をすすめる授業を実施した。

初めに、担任からがん検診の受診を迷っている理由を生徒に伝え、担任ががん検診を受けたいと思うためには、どのようなことを伝えたとよいかを考えさせた。生徒からは、「安城市では補助金が出ているから、お金は心配しなくてもよい」「がんが見つかったら怖いと言っていたけれど、がんじゃないと分かれば安心できると思う」「自分は今元気で健康だから大丈夫と言っていたけれど、がんは自覚症状が出る前に早期発見したら治る確率も高くなる」といった意見が出た（資料4）。

生徒にとって身近な存在である担任を事例として取り上げたことで、生徒はがん検診のメリットを自らの言葉で伝えながら、その重要性について改めて考えることができた。また、自

・検診を受けることで、もし見つかったとしても早く治療できるかもしれない。
 17.2歳で1年後検診を受けることも、見つかったら早く治療できるかもしれない。
 ・「がんが見つかったら怖い」と言っていたけれど、がんじゃないと分かれば安心できると思う。
 ・「自分は今元気で健康だから大丈夫」と言っていたけれど、がんは自覚症状が出る前に早期発見したら治る確率も高くなる」といった意見が出た。
 ・がんが見つかったら怖いと言っていたけれど、がんじゃないと分かれば安心できると思う。
 ・「自分は今元気で健康だから大丈夫」と言っていたけれど、がんは自覚症状が出る前に早期発見したら治る確率も高くなる」といった意見が出た。

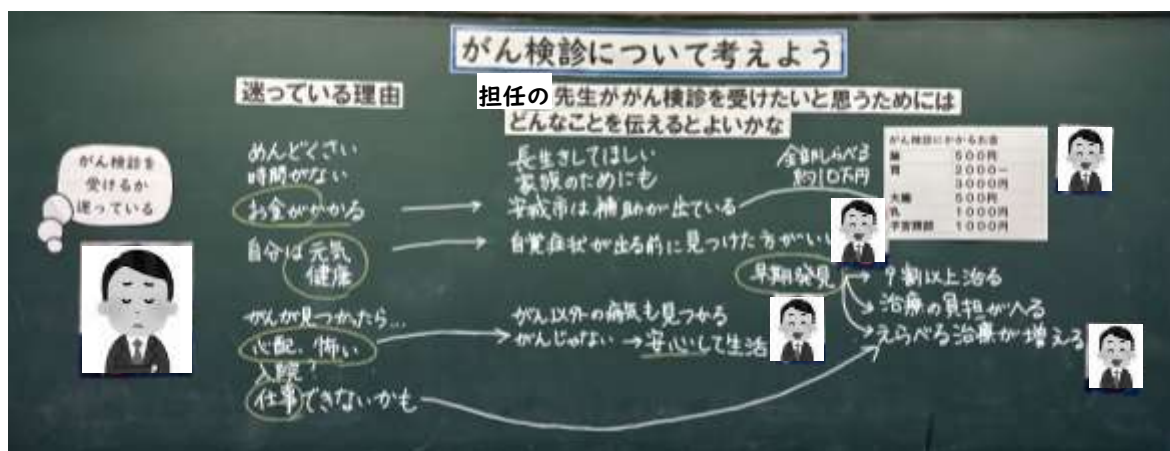
・大腸がん、肺がん = 500円程度で受けることができる。
 ・早期発見することが大切で、なにか分かるか安心して過ごせる。
 ・無症状でもなっている可能性がある。
 ・仕事と両立する必要がある。
 ・企業は5割程度
 約45万

資料4 生徒が担任に伝えることをメモしたもの

〇振り返り
 お母さん、飯島先生、めいちゃんにめんどうさかたつたし、金銭の事もめいちゃんにさるので、Xリットを伝えていきたくし、自分が言っていることも自分でも納得したので、将来大人になったらがん検査も受けたらいいと思う。また、がんは生活習慣病の一つなので、生活習慣を見直していきたいです。

資料5 生徒の振り返り

分や家族にとってもがん検診が大切であることを振り返りで記入した生徒もいた（資料5）。



資料6 授業の板書

(2) 学校保健委員会

学校保健委員会では、がん経験者であり、がんのピアサポーターとして活動している廣田圭さんを講師に招き、自身の体験について講演していただいた。がんを宣告された際の気持ちや、治療中に考えたこと、言われてうれしかった言葉など、がん経験者の実体験に基づく講話は、生徒にとって学習内容をより身近なものとして捉える機会となった。

廣田氏からは、自身の経験を踏まえ、「知らないことが不安につながる」というメッセージが伝えられた。ネット上には様々な情報がある中で、がんについての知識が十分でなかったことで、治療中の不安がより大きくなったという話をしていただき、正しい情報を得て適切に活用することの重要性について理解を深める機会となった。



資料7 学校保健委員会の様子

また、廣田さんからは、治療中に支えとなった家族や友人の話にも触れていただき、周りからのサポートの大切さについても教えていただいた。

生徒からは、「がんは本当に自分たちの身近にあることが分かった」「正しい知識を身につけておくことが大切なんだと分かった」「自分だけではなく、自分の周りもがんになるかもしれない。その時に支えたいと思った」といった感想があった。

自分も、たぶん授業中にがんの？という疑問を抱いた。たまたま、体験した方のお話で知れた。治療法の種類の話や、がんといふ言葉が聞かれた時の驚き、不安、焦り、心配、友達や、特、ているよと言われ、と不安に思ったのは、頭で出し、出た。しかし、私はまだ想像力ではなかった。どうなってしまうのか。貴重なお話の後、学べたことは「今の時間を大切に、病気への間違いない。必ずしも正しい知識をつける」ということ。お話をして、どういふ気持ちで、私もいつか病気になる可能性は十分にあるので、家族や友達と大切にしたい。事前に病気について知っておくという外でも、大事なことだと気づかされた。

資料8 生徒の感想（学校保健委員会）

(3) 掲示

保健室前に、がんに関するクイズやがん検診についての掲示をした。授業や学校保健委員会を終えて、毎日目にする場所に掲示することで、登校後や休憩時間中に掲示を見る生徒の姿が見られ、がんについての関心を広げたり、深めたりすることにつながった。



資料 9 保健室前掲示

3 成果と今後の課題

本実践を通して、生徒ががんを身近な健康課題として捉え、正しい知識を身に付けることができたと考える。

授業前のアンケートでは、がんを身近な病気と感じている生徒は多かったものの、「がんは治らない」「がんになったら必ず死ぬ」などの誤った認識や不安なイメージをもっている生徒が多く見られた。しかし、授業ではクイズ形式による知識の習得や、がん検診についての調べ学習を通して、がんは早期発見・早期治療によって治る可能性が高まることや、予防や検診の重要性について理解を深めることができた。

また、担任をゲストティーチャーとした授業では、生徒が相手の立場に立ちながら、がん検診を受診する意義について考えることができた。検診のメリットや早期発見の大切さを自分の言葉で伝える活動を行ったことで、知識を単に覚えるだけでなく、自分や家族の健康と結び付けて考える姿が見られた。これは、がん教育の目標である「健康と命の大切さについて主体的に考えること」にもつながったと考えられる。

さらに、学校保健委員会では、がん経験者から直接話を聞くことで、生徒はがんをより現実的な問題として捉えることができた。特に、「知らないことが不安につながる」という講師の言葉から、正しい知識を得ることの重要性を実感するとともに、がん患者を支える周囲の理解や支援の必要性についても学ぶことができた。生徒の感想からは、自分自身だけでなく、家族や身近な人ががんになった場合に支えたいという意識の高まりもうかがえた。

加えて、保健室前の掲示による継続的な情報発信は、授業や学校保健委員会で学んだ内容を繰り返し振り返る機会となった。日常的に目にする環境を整えたことで、生徒の学びの定着にも効果があったと考えられる。

本実践により、生徒のがんに対する理解や関心を高めることができた一方で、学習した内容を将来の健康行動へどのようにつなげていくかが課題である。中学生にとってがん検診はまだ先のことであり、知識として理解していても、自分事として継続的に意識することは難しい。そのため、がん教育を単発の学習で終わらせるのではなく、生活習慣病予防や健康づくりの学習と関連付けながら継続的に指導していく必要がある。

また、がん患者やその家族への理解をさらに深められるよう、がん経験者や医療従事者等との連携を今後も図っていきたい。正しい知識の習得だけでなく、多様な立場の人への理解と共感を育むことで、生徒が自他の健康と命を大切にし、支え合うことのできる力を身に付けられるよう

取り組んでいきたい。